

平成22年 5月24日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20730418
 研究課題名（和文） 児童期から青年期への移行を促進する「勤勉性」獲得支援に関する研究
 研究課題名（英文） A psychological research about the attainment of Eriksonian industry to facilitate the transition from childhood to adolescence.
 研究代表者
 伊田 勝憲（IDA KATSUNORI）
 北海道教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：20399033

研究成果の概要（和文）：文献展望と主に大学生を対象とした調査を通して、他者の幸福に関心を持つ「共同体感覚」を伴う限り、自分より優れた他者を尊敬しつつ、そこで感じる劣等感はいむしろその優れた他者に近づこうとする成長へと導くことになるが、「共同体感覚」が欠如すると劣等コンプレックスとなり、優れた他者を否定しながら見せかけの有能感を保ち、自身が変わらない（成長しない）という帰結をもたらすことが推察された。勤勉性獲得のためには他者との信頼関係形成が出发点となる。

研究成果の概要（英文）：This study found that the sense of inferiority with social interest defined by A. Adler facilitates the transition from childhood to adolescence and looking up to superior others, but the complex of inferiority without social interest does not, and make assumed competence not to develop one's own ability. It is necessary to form the relations to others for attainment of the sense of Eriksonian industry.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：青年期，児童期，勤勉性，仮想的有能感，共同体感覚，劣等感，劣等コンプレックス，心理社会的発達

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の国民性とまで言われた「勤勉性」が、物質的な豊かさと利便性の追求を土台とする苦痛の回避（無痛化）と努力の忌避という時代の流れの中で大きく否定され、学校教育において「勤勉性」の価値を伝えることが

難しくなっている。

(2) 心理・社会的発達理論では、青年期の課題が「自我同一性の確立 対 自我同一性の拡散」として表現されているが、今日の青年に見られる現象は、児童期の課題である「勤勉性 対 劣等感」の問題にむしろ一致する。

しかしながら、青年期を対象とした自我同一性の研究に比して、児童期の勤勉性をテーマとした論考および児童期の課題の積み残しと青年期の諸問題を関連づける実証的研究は少ない。

2. 研究の目的

(1) 青年期の学習活動や職業選択等に見られる諸問題の背景として、児童期の発達課題である「勤勉性」の獲得失敗が想定される。近年提唱された「仮想的有能感」の概念は、この問題に焦点を当てる切り口になり得ると考えられるので、概念間の関係を整理する。

(2) 「勤勉性」の概念の捉え方と価値づけ、「勤勉性」の価値を次世代に伝えるための方法・視点について検討し、積み残した課題に再挑戦する「育ちなおし」を促進する方法を探る。

3. 研究の方法

(1) 「勤勉性」等をテーマとする文献研究を継続してその成果をまとめる。Erikson (1963) の心理・社会的発達理論における児童期（勤勉性）に関する論文は少ないが、ニート問題などを扱った近年の社会学的な研究を含めて、関連する研究図書および論文を展望し、青年期（自我同一性）との関係の理論的な明確化を一層進める。調査の実施に向けて、具体的な質問項目の選定・精査を行うための資料とする。

(2) 質問紙法による数量的な調査を実施し、心理・社会的発達の視点から勤勉性・自我同一性と仮想的有能感等の関係を実証的に検討する。具体的には、S-ESDS 日本語版（三好・大野・内島・若原・大野，2003）の Erikson の第Ⅰ段階から第Ⅴ段階までに対応する下位尺度を使用し、特に第Ⅳ段階の勤勉性、第Ⅴ段階の自我同一性に着目する。また、仮想的有能感尺度（速水・木野・高木，2004）により、他者軽視の観点から仮想的有能感を測定するとともに、自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）と合わせて、調査対象者の有能感類型を確定し、関連変数との関係を検討する。

4. 研究成果

(1) 青年期の学習活動や職業選択等に見られる諸問題の背景として、心理社会的発達理論における第Ⅳ段階児童期（勤勉性対劣等感）におけるコンピテンス（有能感）の獲得失敗を想定し、文献展望および質問紙法等による調査を継続してきた。勤勉性については、Erikson, E. H. の指摘とともに、Adler, A. の劣等感および劣等コンプレックスに関する考察を加えた。具体的には、他者の幸福に関心を持つ「共同体感覚」を伴う限り、自分より優れた他者を尊敬しつつ、そこで感じる

劣等感はいむしろその優れた他者に近づこうとする成長へと導くことになるが、「共同体感覚」が欠如すると劣等コンプレックスとなり、優れた他者を否定しながら見せかけの有能感を保ち、自身が変わらない（成長しない）という帰結をもたらすことが推察される。このメカニズムは、速水敏彦の提唱した「仮想的有能感（他者軽視）」の概念が示唆する現象と極めてよく一致する。

(2) 勤勉性の概念の操作化において、技能や知識を中心とする認知的要素、技能や知識の使用に関する行動的要素、そして技能や知識の獲得や使用に対する態度や経験を指す感情的要素の3つが挙げられており、このうち、第二の行動的要素において「他の子どもたちと作業する能力」が指摘されている。これは、共同体感覚と伴って獲得されるものであると考えられる。また、第三の感情的要素における「役に立っている有能な感覚」「物事を知っていてそのやり方をわかっている人々に同一化すること」「学校に通うことの徒弟的性質の価値を理解していること」といった先行研究の記述もまた、他の人への関心を前提としている点において共同体感覚を伴うものと解釈できる。この視点から考えられるのは、他者との共同やそれによる作業の遂行には、勤勉性が必要とされるということのみならず、共同体感覚を伴う劣等感をも必要とするのではないかということである。すなわち、劣等感があってこそ、自分にはできないことができる他者を尊敬し、その他者に近づこうとし、時に共同作業を通して能力を高めていくための取り組みを行うことが可能になる。逆に劣等感に乏しい状況というのは、言い換えれば、周囲の他者には自分より優れた人がいない、尊敬に値する人がいないということである。それは必ずしも事実としてそうであるかどうかは別として、そのように状況を認知している限り、本人の成長はありえないと思われる。こうした意味において、劣等感が必要であり、劣等感に裏打ちされた勤勉性の獲得とコンピテンス（有能感）が必要であると考えられる。

(3) 上記のような文献展望に基づき、対人関係の側面から勤勉性の獲得不足および仮想的有能感の問題を整理した。具体的には、山口（2006）による「生活価値観」という概念を取り上げて仮想的有能感との関連を探り、仮想型に特有の自他の関係性が見られるかどうかを検討した。生活価値観尺度は自己決定志向、他人志向、集団志向、安楽志向、コミュニティ志向の5つの下位尺度から成る。自己決定志向は「危険を冒してでも、自分のやりたいことを貫きたい」、他人志向は「周りの流行にはのり遅れないようにしている」、集団志向は「自分の考えを主張するより、他の人との和を尊重したい」、安楽志向は「自

分にとってプラスになる人とだけつきあいたい」、コミュニティ志向は「家族のためには、自分の死後のことも十分考えておきたい」といった項目に代表される内容である。これら5つの下位尺度について、有能感類型による1要因の分散分析を行ったところ、自己決定志向、集団志向、安楽志向において有意となった。HSD法による多重比較の結果、仮想型において安楽志向が他の3群より有意に高いことが示された。また、仮想型は集団志向が全能型よりも有意に高かった。山口(2006)によると、安楽志向は、「自分の生活と直接関係のない事柄にはあまり関心がない」「他人の権利をいちいち尊重していたら、自分に不利になるだけだ」など自己中心的な人間関係への志向性や非社会的側面が含まれており、疎外感との正相関もあるという。それは、他者や社会との交流の乏しさを意味し、少数の気の合った仲間や狭い生活領域に閉じこもる個人のあり方である。また、集団志向が全能型より高かった点は、和を尊重することから、自分の意見を抑圧して表現できない状態にあると考えられ、仮想型の人々にとっての生きづらさの一端を示しているように思われる。すなわち、安楽志向という一見すると自己中心的で共同体感覚を欠いた対人関係像とは裏腹に、自分にとってプラスになるはずの人で構成されているかどうかは別として、閉じられた仲間集団内では従順ないしは従属的な立場に置かれていることが想像される。

(4) 心理社会的発達理論における第V段階・青年期(同一性対同一性拡散)は、第IV段階・児童期のみならず第I～第III段階・乳児期～幼児期の心理社会的危機と密接に関連していることがわかり、特に谷冬彦の指摘する対他的同一性(本当の自分が他者に理解されている感覚)は第I段階の基本的信頼感に裏打ちされていることが推察された。一方で、対自的同一性(自分のやりたいことが明確である感覚)は第IV段階の勤勉性に裏打ちされていることが明らかになった。これらの知見を総合すると、研究の背景や目的等に指摘した青年期の諸問題は、対他的と対自的の両面から理解される必要があると言える。すなわち、対他的な面としては、他者との信頼関係や共同体感覚が重要であり、対自的な面としては勤勉性や有能感が重要である。青年の「育ちなおし」の支援も必然的にこの両面から取り組む必要があると言える。

(5) 今後の課題としては、あらためてパーソナリティ発達の視点から、エリクソンの心理社会的発達理論とエリクソン以外の発達理論との関連づけをしておくことの必要性が挙げられる。今回のアドラーの視点の導入もその一環であるが、これはエリクソンの心理社会的発達理論を現代の文脈で読み解く

上で必要な作業であると考えられる。例えば、自律の概念を軸に教育を論じている教育学者の岡田(2004)は、「愛着が加わった場合には、大人と子どもという落差にもかかわらず同一化を引き起こし、相手の判断をわが判断とし得るのである。これは往々にして他律の一言で片付けられることの多い現象であるが、自律の敵対物と考えるのではなく、自律の前提としての世界の構造化のための要素蓄積を可能にする機序として理解することが重要である」(p.165)と記している。これは、アドラーのいう共同体感覚にもつながる議論として興味深いのであるが、この自律と他律の区別は、特に心理学の領域では安易に(時に哲学分野とは異なった意味で)考えられがちであるように思われる。本稿ではこの自律の視点は直接取り上げなかったが、先に挙げた努力に関する考察を試みる場合や、学習意欲・動機づけの議論につなげる場合には、非常に重要である。そして、エリクソンの各段階における心理社会的危機および活力として挙げられている概念が、それぞれどのような前提の上に成り立っているのか、第IV段階のみならず、全体的文脈の中で精査されなければならないだろう。仮に第IV段階に注目するにしても、劣等感や仮想的有能感の概念に注目するにしても、やはり心理学あるいは社会学におけるアイデンティティ理論との整合性が追究されなければならないということである。本稿では特に第V段階への移行まで議論し直すには至らなかった。例えば、上野(2005)に述べられているアイデンティティ管理の発想やその中に登場する「補償努力」や「価値剥奪(自らを変えないまま、より相対的に弱者である社会的カテゴリーの人々の価値を奪うことによって自らの社会的アイデンティティを相対的に高める「差別」化戦略, p.23)といった視点は社会的であると同時に、心理学で問題になっている事柄をうまく説明する概念になりうるだろう。もちろん、似て非なるものである可能性も考慮しながら、概念の定義の共通点と相違点を整理していく必要がある。

(6) 心理・社会的発達における勤勉性の獲得は、学習活動と深い関係にあることが推察される。価値観の多様化や将来の不透明さ等によって、学校教育段階で「学ぶことの意味・価値」を実感することが難しくなると同時に、苦痛の回避(無痛化)や努力の忌避という時代の流れの中で「学習の回避」という傾向が意欲低下に拍車をかけている。課題価値(学ぶ理由)とコスト(学ばない理由)の両面に注目し、それぞれが心理・社会的発達の異なる段階に由来するというモデルを構築した上で、学習者が価値実現に向けてコストを受容する動機づけ過程およびその条件・支援策を明らかにすることが今後の課題

である。その際、「努力」に関する議論の必要性が挙げられる。特に日本の文脈を考慮した上での概念の考察が求められるだろう。これは切磋琢磨的な競争という視点や渡辺・土井(2007)の負けず嫌いの概念にも関係するが、努力することへの価値づけの変遷やその背景について、文化的かつ歴史的視点を含む議論なしには、おそらくエリクソンの第IV段階における勤勉性の概念を正当に評価することはできないように思われる。そもそもindustryの語源に遡って、英語圏における概念の捉え方を把握しておくことが必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

1. 伊田勝憲 2009 エリクソンの第IV段階“industry”再考—劣等感と仮想的有能感の関係から— 心理科学, 30(1), 31-43. (査読有)
2. 乾真希子・伊田勝憲 2009 学習塾への通塾経験と中学生・高校生の勤勉性との関係—通塾動機の見点から— 釧路論集(北海道教育大学釧路校研究紀要), 41, 133-141. (査読無)
3. 武久麻衣・伊田勝憲 2009 心理社会的発達における第I~IV段階とアイデンティティ・ステータスの関係 釧路論集(北海道教育大学釧路校研究紀要), 41, 151-161. (査読無)
4. 伊田勝憲 2008 エリクソンの第IV段階「勤勉性」と第V段階「アイデンティティ」—児童期から青年期への移行と仮想的有能感— 心理科学, 28(2), 28-41. (査読有)

[学会発表] (計4件)

1. 伊田勝憲・武久麻衣 自我同一性の尺度間の関係から見える問題—同一性地位判定尺度, 日本語版E P S I, M E I Sをめぐって— 日本教育心理学会第51回総会, 2009年9月22日, 静岡大学静岡キャンパス
2. 伊田勝憲 都筑学(企画)自主シンポジウム「中学生問題の現在—現代の中学生が抱える困難と大人の関わりという視点から—」指定討論 日本教育心理学会第51回総会, 2009年9月20日, 静岡大学静岡キャンパス
3. 伊田勝憲 仮想的有能感と生活価値観の関連—他者との関係性に注目して— 日本パーソナリティ心理学会第17回大会, 2008年11月15日, お茶の水女子大学

4. 伊田勝憲 “勤勉性”(Eriksonian industry)の概念整理から考える“競争”と“回避” 伊田勝憲(企画)自主シンポジウム「エリクソン再考—第IV段階から第V段階への移行をめぐって—」話題提供 日本教育心理学会第50回総会, 2008年10月11日, 東京学芸大学小金井キャンパス

[図書] (計1件)

1. 伊田勝憲 2009 少年少女期の問題—思春期への移行— 心理科学研究会(編)小学生の生活とこころの発達 第2部第3章 5年生—6年生 1 福村出版 pp.133-144.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊田 勝憲 (IDA KATSUNORI)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号: 20399033

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: